

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：23901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13562

研究課題名(和文) 地方ホイッグ政治の研究：19世紀初頭のイギリスにおける地方政党政治の政治文化

研究課題名(英文) Provincial Whiggism: A Political Culture of Local Party Politics in Early Nineteenth-Century Britain

研究代表者

正木 慶介(MASAKI, Keisuke)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00757172

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究期間に得られた成果を、論文と口頭報告に分けて示したい。まず、論文について、「フォックス晩餐会」(『史苑』)では、ホイッグ党議員と地方ホイッグの間での協調関係と緊張関係の両側面を明らかにした。この研究を発展させ、英語論文を提出した(近刊予定)。また、地方トーリの観点からではあるが、地方政治におけるホイッグとトーリの対立を考察した論文を2本刊行した。次に、これらの刊行を踏まえ、その内容をテストする目的も兼ねて口頭報告を多数行なった。国際学会では、イギリス人研究者から多くの重要なコメントを得ることができた。これらの研究成果をまとめたモノグラフの出版契約を得ることもできている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義の一つとして、Parliamentary Historyというイギリス政治史研究の分野で権威ある雑誌から論文を刊行できたことをあげたい。また、本研究課題に沿った単著の出版契約を結ぶこともできた。また、多数の研究會・学会で行なった口頭報告を通じて、国内外の歴史家と交流を深めることができた。とりわけ、国際学会での報告を通じて広げることができた学者間のネットワークは、これからの研究にとっても価値あるものであった。社会的意義については、社会人や中高生、あるいは高校教員との集い・研究会で講演やコメントを行うことで、自らの研究成果を伝えるとともに、人文学研究の意味や価値について意見交換を行った。

研究成果の概要(英文)：Among the articles submitted during this research period, “Celebrating the Fox Dinners” has discussed local party politics in early-nineteenth-century Britain, clarifying both sides of the cooperative relationship and tension between the Whig party in Parliament and their supporters in the provincial urban communities. Based on this essay, I have completed another article written in English, which will be published in an international journal within this year. I have also published two essays on local Tories, both of which have examined the conflict between Whigs and Tories in the same period. I have also read many papers related to these articles at various conferences at home and abroad. At international conferences, many essential comments have been given by British historians. A monograph publishing contract has also been made. This book, based on research results obtained in the last few years, will discuss a Whig associational culture in the early nineteenth century.

研究分野：近代イギリス政治史

キーワード：近代イギリス ホイッグ 政党政治 地方政治 アソシエーション コメモレーション 市民社会 公共圏

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

【本研究課題の申請時における背景】

近代イギリス政治史の先行研究において、議会政党政治史研究は長い伝統があるが、1990年代以降、地域史や社会史への関心が高まる中、議会における二大政党政治の展開が地方政治にどのような影響を与えたかを解明することが重要課題として認識され始めた。これまでの先行研究の多くは、一般的傾向として、1832年の第一次選挙法改正以降の地方政党政治に注目してきた(例えば、Philip Salmon, *Electoral Reform at Work: Local Politics and National Parties, 1832-1841*, Woodbridge, Boydell, 2002)。

1832年以前の地方政党政治史研究はいまだ初期的な段階にあるが、こうした研究状況は、この時期の地方政党政治が重要でなかったことを意味しない。というのも、先行研究はこの時期の議会選挙に注目し、議会における二大政党化を背景に徐々に地方政党が組織され始めたことを指摘しているからである(Frank O'Gorman, *Voters, Patrons and Parties: The Unreformed Electoral System of Hanoverian England, 1734-1832*, Oxford, Clarendon Press, 1989)。しかし、こうした研究は選挙政治の構造に主な関心があり、地方政党自体については十分な検討を加えていない点で問題がある。また、地方政党の活動は議会選挙政治に限定されない。例えば、新聞や雑誌、パンフレットなど印刷物の出版、政治結社の組織化、公共的集会(public meeting)の招集とそれへの参加、都市自治体政治への関与といった点も重要な検討事項に加えられてよいはずである。

よって、地方政党のあり方を、以上のような様々な要素からなる政治行動、およびそれらを支えた政治理念の観点から、総合的に考察していく必要がある。こうした作業は、議会政党と地方政党の関係性を考える上で、さらには、1832年以前・以後の地方政党政治を比較検討する上で必要不可欠なものと言える。

【本研究課題の申請時における動機】

報告者は、博士論文において、トリーに焦点を絞り1815年から1832年の地方政治を多角的に検討した。よって、これを研究上のベースとし、地方ホイッグに関しても同様に多様な観点から考察を加えることで、19世紀初頭におけるイギリス地方政党政治の実態を総合的に明らかにすることを試みる。

地方ホイッグについて詳細に検討するためには、地方政治家、および彼ら関わった地方政治組織など地方の側からの目線を重視する必要がある。近年の研究の中には、議会ホイッグと地方ホイッグが改革の達成に向け密接な関係を結んだ過程を考察したものもある(W.A. Hay, *The Whig Revival, 1808-1830*, Basingstoke, Palgrave Macmillan, 2005)。しかし、この研究は、ヘンリ・ブルームというホイッグ党議員個人の活動に主な焦点を絞っているため、地方ホイッグの主体的な政治運動について踏み込んだ議論を展開できていない。よって本研究は、十分な史料を用い地方ホイッグの側から彼ら関わった様々な政治運動を捉え返すことで、先行研究の抱える問題を克服する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、イギリスのみならずわが国でもこれまでほとんど検討されてこなかった、19世紀初頭(主に1815年から1832年)のイギリスにおける地方政党政治を、地方ホイッグを中心に考察することにある。この研究を通じ、議会における二大政党政治の展開が地方政治に与えた影響の一端を解明したい。

本研究は、リヴァプール、チェスター、エディンバラの三都市におけるホイッグの政治運動に注目し、それを比較分析する。その際、議会や議員の目線から捉えられた地方政治ではなく、地方政治家や地方政治組織など、地方の側の目線を重視する。本研究により、地方ホイッグの主体的な政治運動のあり方を具体的に明らかにすることができるはずである。また、地方ホイッグの政治運動を地方トリーのそれと比較検討することで、当該時期における地方二大政党政治の政治文化を解明する。

3. 研究の方法

本研究は、1815年から1832年までの時期に、リヴァプール、チェスター、エディンバラの三都市において、地方ホイッグが展開した政治運動を比較分析することを試みる。1815年にイギリスはナポレオン戦争に勝利しヨーロッパにおける覇権を握ったが、その後断続的な経済不況も重なり、国内では様々な政治問題が噴出した。こうした問題は、1829年のカトリック解放や1832年の第一次選挙法改正等の自由主義的な改革の要因となっていた。以上の事実は、1815年から1832年をひとまとめに検討することに一定の意義があることを示している。検討地域に関しては、党派対立が特に顕著であり、史料が豊富に残っている上記三都市に限定する。また、研究上の観点としては、新聞やパンフレットの出版活動、政治的アソシエーションの組織、さらには、議会選挙や公共的集会など地域社会において政治が発生する様々な場に着目する。

以上を可能にするために、研究期間中に数度渡英し、公文書館や図書館にて史料収集を行い、また、国際学会でも口頭報告を行う。研究成果は、口頭報告のほか、論文の形式で発表する。研究上の困難に直面した際は、学位取得先であるエディンバラ大学での指導教員や、学会等で知己を得た日英の歴史学者と緊密に連絡を取ることで問題の解決をはかる。

4. 研究成果

2017年度研究成果

2017年度の研究成果について、論文発表、その他刊行物、口頭報告に分けて報告する。

論文については、2本発表することができた。まず、「フォックス晩餐会 ホイッグ党の政治観」『史苑』第78巻第1号（立教大学史学会、2018年2月、167-186頁）では、19世紀初頭に、故人となったホイッグ党指導者チャールズ・ジェイムズ・フォックスを顕彰する目的でイギリス各地で開催された「フォックス晩餐会」(Fox Dinners)について分析を行った。とりわけ、議員である党メンバーと議会外のホイッグ党支持者それぞれが、どのようにフォックスという政治的アイコンを利用し自らの政治的主張を正当化しようと試みたかを考察し、両者の政治理念を明らかにするとともに、その緊張関係についても言及した。次に、「エディンバラ新市街におけるメルヴィル・モニュメントとピット・モニュメント」森原隆（編）『ヨーロッパの政治文化史 統合・分裂・戦争』（成文堂、2018年3月、94-110頁）では、トーリ党の指導者であり故人となったメルヴィル子爵とウィリアム・ピットを顕彰するためのモニュメント建設計画について考察を加えた。結論として、この計画がエディンバラのトーリ支持派の思惑通りに進まなかった背景に、1810年代から30年代にかけて明らかとなった地方ホイッグ勢力の伸長があったことを強調した。両論文によって、議会政治やナショナル・ポリティクスによって影響を受けつつもそれとは相対的に自律して展開する地方政党政治のあり方の一端を析出した。

その他、Angus Hawkins, *Victorian Political Culture: 'Habits of Heart & Mind'* (Oxford: Oxford University Press, 2015)の書評を*East Asian Journal of British History* vol. 6 (East Asian Society of British History, July 2017, pp. 129-133)にて発表した。また、イギリス帝国史についてのフォーラム原稿「帝国史はどこへ行くのか？ 新たなイギリス帝国史研究の視座の提示」『西洋史学』第264号（日本西洋史学会、2017年12月、92-103頁）を、雪村加世子、堀内隆行、田村理、大澤広晃、稲垣春樹、浅田進史との共著で刊行した。前者によって、本研究課題を、19世紀全体のイギリス政治史に位置付けることが重要であると認識することができ、また、後者によって、本研究課題がこれまでそれほど重視してこなかった帝国問題に目を向けるきっかけを得ることができた。

最後に、口頭報告としては、「フォックス生誕記念晩餐会 ホイッグ主義と議会改革」(早稲田大学西洋史研究会70回大会、於早稲田大学、2017年7月8日)に言及したい。これを通じて得ることができた知見をベースに、上記論文「フォックス晩餐会」を完成させることができた。アカデミアの外部においては、「What fascinates you in your subject? #1 歴史家ってそもそも何してるの?」(歴史家ワークショップ、於東京大学、2017年4月22日)と、「若手研究者、生徒、市民の対話 人文学から見る教育と研究の接続」(第32回土曜市民公開講座サタデープログラム、於東海中学校・高等学校、2017年6月24日)でコメント・講演を行い、本研究課題も踏まえながら、歴史学研究そのものや、広く人文学研究の意義や価値について非専門家と意見交換を行った。

2018年度研究成果

2018年度の研究成果について、論文発表、その他刊行物、口頭報告に分けて報告する。

論文に関しては、「Within the Bounds of Acceptability: Tory Associational Culture in Early-19th-Century Britain」をイギリス政治史研究において権威のある学術雑誌*Parliamentary History* (Wiley-Blackwell, vol. 37, issue 3, October 2018, pp. 389-414)で発表することができた。面識はないが研究分野を共有するイギリス人研究者から突如メールが届きコメントや批評をもらうことができたとき、こうした国際ジャーナルに論文を刊行することの意義を感じることができた。

その他刊行物として、『史学雑誌』(史学会)が年に一度特集している学界動向「回顧と展望」で、「近代イギリス」(後半)分野の執筆を担当した(第127編・第5号、2018年5月、345-348頁)。2017年に発表された当該分野の単著本・共著本・論文計80点ほどに目を通し、テーマ別に動向を整理した。この作業を通じて、本研究課題を進める上での着想を複数得ることもできた。

口頭報告としては以下の2つに言及したい。「19世紀初頭イギリスにおける政治的アソシエーション トーリ系結社と公共圏」(名古屋近代イギリス研究会、於名古屋市立大学、2018年8月4日)と、「Celebrating the Fox Dinners: The Whig Party's View of Politics」(British Society for Eighteenth-Century Studies, 48th Annual Conference 2019, St Hugh's College, University of Oxford, 4-6 January 2019)である。両報告とも、地方トーリの側からではあるが、19世紀初頭のイギリスにおけるアソシエーションとコメモレーションの政治に迫った。あわせて、地方トーリの政治的競合者としての地方ホイッグが展開する同様の政治との比較参照も行なった。これに加え、学会および研究会において、本研究課題も踏まえた専門的立場から、コメンテーターをつとめた。一つは、日本西洋史学会第68回大会小シンポジウムにおいて、「コメント イギリス史の側から」というタイトルで、ナポレオン帝政時代におけるイギリスの公共圏・公共性について論じた。小シンポジウム名は「ナポレオン帝国と公共性」である(於広島大学、2018年5月20日)。いま一つは、イギリス史研究会第44回例会における、中村武司(弘

前大学)「長い 18 世紀イギリスの海軍・議会・文化 ウェストミンスター選挙区を中心に 」に
対するコメントである(「中村報告に対するコメント」)。報告者によるこれまでの近代イギリス
政治史研究を踏まえ、多角的に論点を提示した(於専修大学、2018 年 6 月 23 日)。

2019 年度研究成果

2019 年度の研究成果について、論文発表と口頭報告に分けて報告する。

論文に関しては、刊行できたものはなかったものの、以下 2 点を学術雑誌に投稿し出版が決ま
った。まず、'The Posthumous Cult of Charles James Fox: Whig Associations in the 1810s'
というタイトルの論文を、学術雑誌 *Leaves* (CLIMAS (Cultures, Littérature et Linguistique
des Mondes anglophones) de l' université Bordeaux-Montaigne), vol. 11, 2021)に書いた。
これは、*The Posthumous Cult of Charles James Fox in the Early Nineteenth Century*とい
うタイトルで Edwin Mellen Press より出版することになっているモノグラフの核の一つとなる。
次に、「フランス革命・ナポレオン戦争期イギリスの政治的公共圏」というタイトルで、出版予
定の論集の一章となる論文を書いた。これは、前年度の日本西洋史学会の小シンポジウム「ナポ
レオン帝国と公共性」でのコメントがベースになっている。論集は岡本明・安藤隆穂を編者に、
『ナポレオン帝国と公共性』という表題で刊行される予定である。

口頭報告については、昨年度に引き続き、British Society for Eighteenth-Century Studies
の年次大会で発表を行った。タイトルは、'The Construction Projects of the Melville
Monument and the Pitt Monument: Edinburgh Tories in the Early Nineteenth Century'
である(49th Annual Conference, St Hugh's College, University of Oxford, 8-10 January
2020)。次に、学会小シンポジウムのコメンテーターをつとめた。報告タイトルは「フランス革
命期イギリスの「ジャコバン主義」で、小シンポジウム名は「『革命』『自由』『共和制』を読み
替える 向こう岸のジャコバン 」である(日本西洋史学会第 69 回大会、於静岡大学、2019 年
5 月 19 日)。本シンポを踏まえ論集が出版される予定であり(中澤達哉編) 報告者も執筆陣に
加えられることとなった。この出版企画の一部として研究会が開催され、そこで「ジョン・セル
ウォールの政治思想 人民主権・コモンウェルス・民主主義 」というタイトルで口頭報告を行
った(2020 年 3 月 31 日;新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けオンラインでの研究会と
なった)。ジョン・セルウォールという急進主義者の政治的言説に着目し、1790 年代前半のイギ
リス・ジャコバンの思想を特に国制論の観点から分析した。18 世紀末の急進主義者の政治理念・
政治行動を検討することは、本研究課題が対象とする 19 世紀初頭における地方ホイッグ政治の
歴史的意義を考える上で、重要な視点を提供してくれるものであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Keisuke Masaki	4. 巻 11
2. 論文標題 The Posthumous Cult of Charles James Fox: Whig Associations in the 1810s	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Leaves	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Keisuke Masaki	4. 巻 37
2. 論文標題 Within the Bounds of Acceptability: Tory Associational Culture in Early-19th-Century Britain	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Parliamentary History	6. 最初と最後の頁 389-414
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 正木慶介	4. 巻 127
2. 論文標題 近代イギリス	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 345-348
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 正木慶介	4. 巻 78
2. 論文標題 フォックス晩餐会 ホイッグ党の政治観	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 167-186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 正木慶介・雪村加世子（編）	4. 巻 264
2. 論文標題 帝国史はどこへ行くのか？：新たなイギリス帝国史研究の視座の提示	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 92-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 正木慶介
2. 発表標題 ジョン・セルウォールの政治思想 人民主権・コモンウェルス・民主主義
3. 学会等名 科研「ジャコバン主義の再検討 「王のいる共和政」の国際比較研究」（基盤研究B）研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Keisuke Masaki
2. 発表標題 The Construction Projects of the Melville Monument and the Pitt Monument: Edinburgh Tories in the Early Nineteenth Century
3. 学会等名 British Society for Eighteenth-Century Studies, 49th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 正木慶介
2. 発表標題 近世イギリスの王権と議会 『近世ヨーロッパ』へのコメント
3. 学会等名 2019年度愛知県立大学世界史セミナー 第1回「近世ヨーロッパをどう見るか」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 正木慶介
2. 発表標題 フランス革命期イギリスの「ジャコバン主義」
3. 学会等名 日本西洋史学会第69回大会小シンポジウム「『革命』『自由』『共和制』を読み替える 向こう岸のジャコバン」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keisuke Masaki
2. 発表標題 Celebrating the Fox Dinners: The Whig Party's View of Politics
3. 学会等名 British Society for Eighteenth-Century Studies, 48th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 正木慶介
2. 発表標題 コメント イギリス史の側から
3. 学会等名 日本西洋史学会第68回大会小シンポジウム「ナポレオン帝国と公共性」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 正木慶介
2. 発表標題 中村報告に対するコメント
3. 学会等名 イギリス史研究会第44回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 正木慶介
2. 発表標題 19世紀初頭イギリスにおける政治的アソシエーション トーリ系結社と公共圏
3. 学会等名 名古屋近代イギリス研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 正木慶介
2. 発表標題 フォックス生誕記念晩餐会：ホイッグ主義と議会改革
3. 学会等名 早稲田大学西洋史研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 森原隆（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 326
3. 書名 ヨーロッパの政治文化史：統合・分裂・戦争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考